



Title	〈孤人〉社会を開く : 弔いを問う前に、「無縁社会」や「自殺社会」を超えて
Author(s)	兵頭, 晶子
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 63-86
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55492">https://hdl.handle.net/11094/55492</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈孤人〉社会を開く

——弔いを問う前に、「無縁社会」や「自殺社会」を超えて——

兵 頭 晶 子

### はじめに——「無縁」や「自殺」が意味するもの

2010年1月、「無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃～」というNHKスペシャルが放送された。そこでは、「身元不明の自殺」や「行き倒れ」、「餓死」や「凍死」など、警察も途中で身元確認を諦めている「無縁死」が、全国の市町村への調査の結果、年間三万二千人にも上ることが明らかになった。

年間三万二千人の人びとが誰にも看取られず、孤独と孤立の中で死んでいき、家族や親族がいても遺骨も引き取られず、身元不明の「行路病者」として事務的に処理されていく風景が、そこにはあった〔NHK「無縁社会プロジェクト」取材班2010〕。

しかしそれは、今まで、ハンセン病療養所や精神病院の中で当たり前<sup>1</sup>に積み重ねられてきた光景でもある。彼らは「家族への迷惑を考<sup>2</sup>えて」場合によっては実名さえ奪われ<sup>3</sup>、社会や家族とのつながりも断たれ、療養所や病院でひっそり葬られてきた〔安宅 2009：40〕。「無縁社会」とは、こうした、孤独の中で死んでいった病者たちの痛み<sup>4</sup>に無関心かつ無感覚であり続けてきた私たちの「社会」の果てに待つ、いわば避けがたい末路ではなかったか。

このことを、私の著書『精神病の日本近代』は、次のように問題提起している。

いま、精神病を語るために必要なのは、私たちの心身からすべてを問い直すことなのだ。もうこれ以上、近代社会が創り出した架空のために、精神病者の現実を踏みにじることがないように。もうこれ以上、私たちの心身が、誰かの痛み<sup>5</sup>に無感覚でいることのないように。そのとき、私たちは、忘れていた自分自身の痛みを思い出すのかもしれない。〔兵頭 2008：309〕（傍点引用者、以下同様）

さらに言うなら、今日は、年間三万人以上、一日におよそ百人の人間が自殺していく、「自殺社会」でもある。この痛ましい現実を、NPO法人・自殺対策支援センター「ライフリンク」代表の清水康之は次のように述べている。

〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

だから、先ほどの話で言えば、「自殺していく彼らと自分は違う」と思い込みたい、ということになるんでしょうね。

誰もがギリギリの恐怖感で毎日を生き延びているからこそ、「自分は違う。自殺していく彼らは、自分にはない弱さがあったからだ」と思い込んで、自分だけは大丈夫と信じたいという。〔清水・上田 2010：91〕

つまり、誰かの痛みに関心・無感覚でいることは、自分たち自身の痛みにも麻痺してしまっている、あるいは、薄々気づきかけている自身の痛みを直視したくないということでもある。では、なぜ、不安や痛みを感じながらも、直視したくないのだろうか。

清水と対論した人類学者の上田紀行は、この問題を次のように指摘している。

支えなんかないんだ。だから寝た子を起こしてしまっちは、大変なことになる。そのことには触れないようにして生きよう……そうやって、自殺問題は触れてはいけないものとして無意識のうちに隠蔽され、忌み嫌われるものとして排除されていく。しかしそれでは限りない悪循環である。〔清水・上田 2010：240〕

「支えなんかない」という絶望感や孤立感が、一日に百人もの人を自殺させ、あるいはごく当たり前の生活をしてきた人びとにひとつ、またひとつと、社会とのつながりを失わせ、ひとり孤独に生きて亡くなり「無縁死」とさせていく。そうした絶望感や孤独感が、その手前で何とか踏みとどまっている人びとをも苦しめ続けているのではなからうか。だとすれば、「無縁社会」も「自殺社会」も、断じて他人事ではない。それは、限りなく、今を生きる私たち自身の問題である。

「無縁社会」や「自殺社会」が問いかけていることは、かつて民俗学で言われてきたような「弔い」の不在である。親を自殺で亡くした遺族は、そのことを精神的に「話せない」状況にさえ追い詰められてしまうのだと、清水は指摘している〔清水・上田 2010：28〕。しかし、それ以上に切実に問われているのは、「弔い」の不在の前に在る「生」、「支えなんかない」と思わせてしまう孤独と絶望に覆われた痛ましい「生」である。それは、たとえば「孤育て」という言葉にも、端的に示されている。

実家や友だちから遠く離れ、多忙な夫と、慣れない家事、育児。

まじめに独りで抱え込んで壊れるお母さんは、本当に多いのよ。<sup>2)</sup>

また、精神科医の藤澤敏雄は、自殺に至る病者の心情を次のように推し量っている。

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

自分の愛する者、自分を想ってくれている者への配慮が自死をおしとどめるということはあることである。自己以外のかかわりのある人への配慮である。

逆に考えれば、自死にいたる病者は、もはや、死への恐怖や他者への配慮も及ばないくらいの孤絶に追い込まれていたとしか言いようがない。はげしい幻覚・妄想の中で迫害されていると感じている病者の場合も、抑うつ感情の中で罪責感を強く抱いている人も、「精神病」ということの意味について若干の誤解を含みながらも直視した人も、同じように、想像をこえた「孤絶」の中におかれたにちがいない。〔藤澤 1982：248〕

このことは、病者ではなく自殺していった人びとにも、限りなく当てはまるだろう。

だが、本当に「支えなんかいない」のだろうか。人は、極限まで追い込まれると、それが分からなくなってしまうだけではないのだろうか。自分を愛してくれる誰か、自分を想ってくれている誰かが確かにいるはずなのにも関わらず。

ではなぜ、人は「孤絶」に追い込まれるのか。上田紀行は、次のように語っている。

それで、どんな人に《悪魔》が憑くのかと聞いてみると、スリランカの人は必ず「孤独な人に悪魔が憑く」と言うんです。「孤独な人に悪魔の眼差しが来る」と。

だから悪魔はいたほうがいいんです。日本はそうした《悪魔祓い》のような孤独を救うシステムがなくなってしまったところに、大きな文化社会的な危機があるのです。〔清水・上田 2010：61, 65〕

それは、『精神病の日本近代』に引きつけて言うならば、〈憑く心身〉を退けてきた日本近代という歴史が、「憑きもの落とし」や「民間治療場」などの「孤独を救うシステム」の民俗をも片隅に追いやってきたと言えるだろう。あらゆる問題を自身の責任において引き受け、抱え込まざるを得ない〈病む心身〉とは、ミシェル・フーコーが指摘したような「近代的個人」の問題〔フーコー 2006：71〕<sup>3)</sup>にとどまらず、孤独や孤立や孤育ての問題性が叫ばれる今日においては、〈孤人〉と言い表されるべき何かなのではなからうか。

一日におよそ百人の人間が自殺していく「自殺社会」。そして、「これ以上、自分のことで誰かに迷惑をかけたくない」と、孤独と孤立の内に死んでいく「無縁社会」。その只中に生きている私たちが、〈精神病の日本近代〉の果てに受け継がれてきた〈孤人〉という負債を、どのように改め、清水や上田が言うように、「生き心地の良い社会」へと繋いでいけるのか。それは、「弔い」を問う前に在る、極めて今日的な課題である。

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

自殺問題は単なる一つの問題ではない。そのことに真正面から取り組むことで、時代の根本的な転換をもたらす、大きな歴史的課題なのである。

多くの人たちの死を無駄にしてはいけない。今こそ、時代を一つ前に進める時なのだ。〔清水・上田 2010：241〕

そこで本論文では、「孤」という漢字の字義、「②ひとりもの。よるべのない者。「孤独（幼くて父のない子供と、老いて子のない者）」、「④ひとりぼっち。ア）仲間のないこと。イ）助けのないこと。「孤立」」、「⑦離れる。遠ざける。遠ざかる。」〔鎌田・米山 1986：293〕に則り、今日の「無縁社会」や「自殺社会」を越えるために、その問題性を〈孤人〉社会と名付け、その幾重にも閉ざされた可能性を、「支え」へと開いていくことを目指してみたい。

繰り返すが、誰かの痛みに気づくことは、忘れていた私たち自身の痛みを思い出すということでもある。本論文が、今を生きる人びとの、ささやかな「支え」となれば幸いである。

### 1. 「我々」から「私たち」へ——近代という病を抜けて

#### (1) 「私たち」という問題提起

具体的な論に入る前に、本論文の「私たち」という主語について、整理しておきたい。『精神病の日本近代』を書評してくれた岩尾俊一郎は、次のように述べている。

本書は著者の「どうして私に狐が憑かないのか」との問いから生まれた。それは「私にもあなたと同じように狐が憑く」と感じていた近代以前の日本の民衆の心身に思いを寄せることであつたらう。

「私はあなたと違って病んでいない」と感じたい現代のわれわれの心身がいかに蝕まれているのかを見ようとしなないことは、イラクからガザまで戦争にあふれ、存在しない金を浪費して世界中を借金地獄に引きずり込むこの世がいかに「狂っている」のかを見ようとしなないことと同じである。

「病まない心身」という仮象の中で生きるわれわれは、健康と正気を追い求め、すっかり不健康と狂気に侵されている。「憑かない心身」となってしまったわれわれは、私ではない「誰かの痛みが無感覚である」心身となってしまっているのではないかと本著は問うている。〔岩尾 2009：140〕

この場合「仮象」とは、ドイツ語の「Schein=見せかけ」の訳語であり、「それ自身あたかも存在しているように見えて、本当は実在していないもの」〔金田一他 1993：216〕

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

を意味している。つまり、「私はあなたと違って病んでいない」という、自我と他者の差異を前提とした心身観は、近代以降に造られたもので、本当は実在していないのではなかったか。「私にもあなたと同じように狐が憑く」と感じていた、近代以前の民衆の心身観、言い換えれば「私たち」という心身観こそが、今こそ必要とされているのではなからうか。

では、「我々」と「私たち」はどのように違うのか。英語で表すならば、everyoneとしての「我々」と、ourselves（myselfの複数形）としての「私たち」というように、ひとまず区別しておきたい。つまり、「私」がまだ会ったこともない誰かを、強引に「我々」という同一性・同質性においてくり出すつもりはないが、「私」（myself）の思いや痛みに影響してくれる、共振してくれる誰かへ伝える主語として、「私たち」を設定したいと思う。

なぜなら、「1980年代の終わりから90年代前半にかけて日本で猛威を振るった」自己決定論、およびそれと表裏一体をなす自己責任論では、〈孤人〉は一向に開かれていかないからだ。そのことを、宮崎哲弥は、以下のように指摘している。

「選択する主体としての自立的個人」〔従来の哲学や倫理学の出発点：引用者注〕なるものが、自我の存在性質についての熟慮を書いた虚構に思えた。その虚構を「負荷なき自我」と命名し、批判してくれたのがサンデルのコミュニタリアリズムだった。

しかし、<sup>わたしたち</sup>私達は真空に生まれ落ちるのではない。共同世界の<sup>ただ</sup>只中に生まれ、共同体から有形無形の資産を相続し、それらを養分として自我を形成していく。その中には共同体が過去に背負った負の財産も含まれる。

その負債継承を前提として、さらに内容を吟味していくことこそが、政治道德の陶冶の出発点である。これがサンデルの結論であり、私の結論でもある。<sup>4)</sup>

つまり、今、私たちは必要なのは、宮崎の言う通り、現実を「私たち」から考えることなのだ。「私ではない」「誰かの痛みは無感覚でいる」心身となってしまっている「私たちの心身を、無縁死した人びとや自殺した人びとの痛み、ひいては〈いのち〉の痛みへと響かせていくことなのだ。それこそが、〈精神病の日本近代〉という負債を継承した果てにある、今日の〈孤人〉社会を開いていく出発点なのではないかと、私は思う。

### (2) 「この世界とつながるための窓」としての苦勞——「私たち」の地平へ

末木文美士は、「人<sup>ふみひこ</sup>の間」という言葉で、従来の倫理を説明している。

人は孤立して存在するわけではなく、またばらばらな個人がまったくの無秩序の状態<sup>ふみひこ</sup>で集まり、そこで社会契約を結ぶわけでもない。生まれたときから「人<sup>ふみひこ</sup>の間」にい

〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

るのであり、「人之間」で生きていけるように育児教育がなされる。その「人之間」を成り立たせるルールが倫理である。〔末木 2006：103〕

しかし、従来の倫理では、自我すなわち「我々」の中に「他者」を包摂できない。末木は、相互了解という「共通のルールが壊れたとき、人は理解不能の「他者」として現れる」と述べている。たとえば、一般的には理解不能な動機を語って殺害に及ぶ殺人者のように。

そこでは、倫理も法律も政治の規則も成り立たなくなる。「他者」の出現にどう対処したらよいのだろうか。排除して、なかったことにしてしまうしかないのだろうか。〔末木 2006：106-107〕

しかし、彼らは本当に「理解不能の「他者」」と呼ぶべき存在なのだろうか。末木は、引き続き、次のように語っている。

ルールに収まりきれず、理解不能の「他者」は、外側にいるばかりではない。自分の内にも住み着いている。他人の顔は見ることができるが、自分の顔は見えない。いちばんわからないのは自分かもしれない。自分の内なる感情がどのような行為を惹き起こすか、それは自分でも見当がつかない。

たとえば、自分の子供はかわいい。そこまではいいが、もしかしたらそこから進んで、自分の子供より恵まれた他の子供を憎み、その親を憎み、殺意が芽生えるかもしれない。どこまでが認められる感情であり、どこからが逸脱であるか、連続的に変化していく中で、その一線はなかなか判断がつきにくい。

あるいは、もっと微妙な例を挙げれば、幼児虐待は、必ずしも子供を愛していないから起こるわけではない。それでも手が出てしまうとしたら、どうしたらよいのだろうか。〔末木 2006：107〕

つまり、「自分こそ自分で制御できない、最大の「他者」ではあるまいか。」と末木は結論している。だとすれば、自我と他者を当たり前のように分けて考えてきた、あるいはそう考えさせられてきた「近代的個人」観こそ、問い直されて然るべきだろう。

「我々」は自我の複数形であり、そこに「他者」は包摂されない。しかし、「自分」の中にも「他者」がいるとすれば、そこに「語りえないものが何かある」とするならば、「間柄」的な〈人間〉のレベル、公共的な言葉のレベル〔末木 2006：102〕、すなわち、従来使われてきた「我々」という主語に代わり、「私たち」という主語を据えることにも、大

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

きな意味があるだろう。そこには、いわゆる〈人間〉以外の何かも、含まれて然るべきだと考える。

このことを、精神科医の仲野実は、次のように説明している。

そして、これが最も基本的なことであるが、「近代」においては、私たちは、世界を「私」から切り離して、「対象」としてしか見てこなかった。世界を「対象」として見る。これが「近代」の原理である。と同時に、これが「近代」をして、地球史上最も残酷な二百年にした元凶でもある。

「降りて行く」と言うのは、世界を「対象として見る」という見方一辺倒ではなく、「私をも含めての一体として、世界を見る」見方、感じ方を、取り戻すことである。芭蕉が、〔静けさや 岩にしみいる 蟬の声〕と詠んだあの「一体感」を、である。〔仲野 2009：5〕

つまり、「他者」という認識もまた、世界を「私」から完全に切り離すことで、初めて成立する。しかし、二度の世界大戦、大量虐殺、環境破壊など、「他者」とされた「世界」にとって「最も残酷な二百年」である「近代」は、「私」にとっても、あるいは「我々」にとっても、さらには「私たち」にとっても、十分に残酷な二百年だったと言えるだろう。

〈孤人〉という存在もまた、自分を世界から切り離し、独りで問題を抱え込むことの生きづらさを意味している。ならば、〈孤人〉社会を開くことは、「私」と「他者」という区分けそのものを問い直し、〈人間〉以外の何かを含めた「私たち」から総てを問い直すことへと繋がるだろう。〈人間〉に囚われていては、〈孤人〉社会は開けない。

このことを、北海道浦河「べてるの家」を長年観察してきた斉藤道雄は、次のように語っている。

苦勞すること、苦勞することによって「ほかの世界で生きている人」とつながるということ、そうすることで人は「人間の本物に通じる入口」に立てるのではないかという思い。それは向谷地<sup>むかいやち</sup>さん自身の、ひとりの思いとして淡々と、独白のように語られている。しかし、だからこそその言葉は、底深い力をもって私たちに問いかけてくる。

苦勞をそのように捉えるとき、私たちもまた自らを開くことができるのではないかと。他者につながることもできるのではないかと。そのような苦勞を自ら担うことによって、私たちは人間の広い世界と、歴史につながることもできる。…その広い世界に、人間の流れのなかに、あなたもまた身をおくことができるのだと。〔斉藤 2010：237〕



ここに、〈孤人〉社会を開く最大のヒントがあるだろう。そこで、次章では、無農薬のリング栽培に挑戦した木村秋則の気づきから、「私たち」の地平を考えてみたい。

## 2. 「私たち」の世界観へ——〈いのち〉の意味を取り戻すために

### （1）モノから〈いのち〉へ——〈孤人〉社会の前提にある躓きを正すために

2010年の4月から8月に書いて、宮崎県で発生した牛・豚の口蹄疫と、約29万頭に及んだ「殺処分」は、「自分の家族同然の牛」を殺さざるを得ない畜産農家の痛みがネット上で配信された<sup>5)</sup>。それは、畜産農家から出荷され、屠殺場で切り分けられ、私たちがスーパーで購入する「食肉」が、同時にかけがえのない〈いのち〉であることの、ありふれていて痛いほど残酷な重みを意味している。このことを、中村生雄は、「人は、動物を殺し、食べることで、みずからの“いのち”を保っている」のだと指摘している。「人が生きていくうえで背負い込まないではおけない行為のもろもろの代償として」〔中村 2010：194〕こうした矛盾があるならば、なぜ人は、そのことを正面から問おうとしないのか、とも問うている。

だとすれば、私たちの〈いのち〉は、私独りの心身では完結しない。しかし、近代社会は、人間を含めた〈いのち〉を、代替可能な資源＝「モノ」として消費してきた。そこに、あり得ぬはずの中心・「虚偽の主体」として「我々」が穿たれ、そこから「他者」と呼ばれてきた何かや〈いのち〉が零れ落とされてきたのである。

「我々の空間」の、まっ正面に、アウシュビッツの闇と、ヒロシマの閃光があるのだということ。いかに色鮮やかであろうとも、「我々の空間」は、史上最も徹底した全体主義空間なのだということ。これは、一九四五年に、既に誰もが知ってしまったことである。

だのに、世界のあちこちで、まだ「我々」のための戦争が続いている。あるいは、「我々」ということばが、「私」の日々の生活を増々、息苦しくしている。〔仲野 2009：271〕

では、仲野実が言うように、〈いのち〉をないがしろにする「我々の空間」という「近代」を、いかにして「抜けていく」か。人が独りで生きる〈孤人〉社会をどのように開いていくかが大きな課題となってくる。そのことを、仲野は、次のように述べている。

モノを作る生産活動（プロダクション）一辺倒を止め、それらのモノを関係付け、価値付ける活動（アソシアシオン）を、取り戻すことである。今、地球上は雑多なモ

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

ノで溢れかえっているが、それらが私たちの幸せに結びついているという実感が無い。  
〔仲野 2009：4〕

どんなに科学技術を駆使しても、人は、「無」から何かを生み出すことは決してできない。いわゆる「生き物」だけでなく、人が手を加えた加工物や人造物も、本来は〈いのち〉であり、しかもそれは一個で完結しているわけではないと言えるだろう。もちろん、〈人間〉も含めて、である。

では、〈人間〉も含めてモノとして消費してきた近代社会が、モノが〈いのち〉であることを取り戻すために、今、何が必要なのだろうか。仲野は次のように語っている。

今は、世界中に〈もの〉があふれています。しかし、〈こと〉が枯渇しているのです。今世界中に〈ある〉の状況は、充分すぎるほどあります。しかし〈いる〉の状況が枯渇しているのです。〈いる〉の状況を、人びとは、無駄なこと、たわいもないこととして無視します。しかしこの無駄なこと、たわいもないことが今大切なのです。〔仲野 2009：219〕

この一文を、図式化して整理してみよう。

〈ある〉の状況：私と切断された他者＝〈対象物〉の間に、連続や繋がりが無い

→ 〈もの〉という認識の成立

↑ ↓

〈いる〉の状況：私と他者（私でない者）が「一繋がりの世界の中に共存している」

→ 〈こと〉という認識の成立

すなわち、「〈いる〉の状況とは、私と他者によって張り渡される世界」なのである。「だから、〈いる〉の状況が成立するためには、生きて、見て、感じる私がいなければなりませんし、あなた（他者）も生きていなければなりません。」〔仲野 2009：215〕と仲野は言う。

口蹄疫の「殺処分」のような一種のホロコースト（大量虐殺）、あるいは「無縁社会」や「自殺社会」という〈孤人〉社会を許さないこの状況を、いかにして蘇らせることができるのか、今問われているのだと私は思う。

### （2）「奇跡のリンゴ」——互いに〈いのち〉として向き合う瞬間

ここで、農薬の使用を前提に品種改良されてきた「近代」の産物であるリンゴを、無農

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

葉で育てるといふ、「日本のリンゴ栽培の歴史を逆回しにした」農家・木村秋則の無謀な試みから、モノを〈いのち〉へと蘇らせていく過程を検討したいと思う。

農業で弱ってしまう妻のために、木村は無農業栽培に挑戦した。しかし、六年間の苛酷な努力の果てに残されたのは、病気と害虫に喰い荒らされた瀕死のリンゴの木だった。『無理をさせてごめんなさい。花を咲かせなくても、実をならせなくてもいいから、どうか枯れないでちょうだい』と、木村はリンゴの木の一本一本に話しかけ、初めて頭を下げた。

リンゴの木は、リンゴという果実を生産する機械ではない。リンゴの木もまた、この世に生を受けたひとつの命なのだ。当たり前のことのようにだけれど、心からそうだと思えることとはまた別の話だ。彼[木村秋則、引用者注]はそのことを誰よりもよく知っている。だからリンゴに声をかける。木村は人という生き物として、リンゴという生き物と向かい合っている。〔石川 2008：112〕

そして木村は、「この場所に棲む生きとし生けるものすべての合作」である、山の土を畑で再現すればいいのだという気づきに、自分が自殺を覚悟した瞬間に、初めて至った。

自然の中に、孤立して生きている命はないのだと思った。ここではすべての命が、他の命と関わり合い、支え合って生きていた。そんなこと分かっていたはずなのに、リンゴを守ろうとするあまり、その一番大切なことを忘れていた。

自分は農業のかわりに、虫や病気を殺してくれる物質を探していただけのことなのだ。堆肥を施し、雑草を刈って、リンゴの木を周囲の自然から切り離して栽培しようとしていた。リンゴの木の命とは何かということを考えなかった。〔石川 2008：126〕

「自分のなすべきことは、その自然を取り戻してやることだ。」と木村は気付いた。その二年後、雑草が高く生え、虫や蝶が飛び、動物が駆け回る野山のような畑で、リンゴの木は一斉に白い花を咲かせ、「奇跡のリンゴ」を实らせた。しかし、隣の畑の人目を憚って「木村が声をかけずにすませたリンゴの木は、一本残らず枯れてしまっていた」という。

木村は、そのエピソードから、〈孤人〉社会への警鐘を、次のように鳴らしている。

リンゴの木は、リンゴの木だけで生きているわけではない。周りの自然の中で、生かされている生き物なわけだ。人間もそうなんだよ。人間はそのことを忘れてしまっていて、自分独りで生きていっていると思っている。そしていつの間にか、自分が栽培している作物も、そういうもんだと思ひ込むようになったんだな。農業を使うことのいちばん

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

の問題は、ほんとうはそこのあるところにあるんだよ。

農薬を撒くということは、リンゴの木を周りの自然から切り離して育てるといふことなんだ。〔石川 2008：131〕

つまり木村は、出荷して生業を成り立たせるためのモノすなわち「商品」ではなく、〈いのち〉としてリンゴと向き合い、またリンゴに生かされているのだと言えよう。

世界が、あるいは「自然」が〈生き方の違ういのちの繋がり〉<sup>6)</sup>で育まれ、成り立っているということを、もう一度、思い出すこと。その繋がりこそが、私たち〈人間〉をも生かし、生かされ、私たちは、本来は決して〈孤人〉ではないのだということ。

それが、ホロコースト（大量虐殺）という口蹄疫の「殺処分」の惨劇を、あるいは「無縁社会」や「自殺社会」という痛ましい〈孤人〉社会を、未来と開いていくための、唯一の方法ではないだろうか。

### 3. 〈繋がり〉の中で「治る」——「おたがいさま」で「いいかげん」の世界へ——

長くかかわっていると、だんだん自然体になってくれるところだなあと。

だから、ただつきあってればいいんですよ、治すっていうよりは〔齊藤 2010：210〕

#### (1) 「病気」とはどこにあるのか——〈ハレ〉と〈ケガレ〉のあいだ

ここで、〈ケ〉すなわち日常が枯れてしまう状態としての〈ケガレ〉と、〈ケ〉を蘇らせる非日常としての〈ハレ〉の時空間という観点から、〈孤人〉社会の問題性を検討してみたい。

昔から、〈ハレ〉〈ケ〉〈ケガレ〉ということが言われていますね。でも昔は、〈ケガレ〉や〈ハレ〉の部分があってもそれは一時的なもので、いつでも〈ケ〉に戻れるようなものだったと思うんですが。

〈ケ〉つまり、日常に戻った時にありがたみを感じるための〈ハレ〉であり、〈ケガレ〉であった。でも今はそれが戻れなくなっちゃっている感じがするんですよ。〔清水・上田 2010：75〕

〈ケガレ〉すなわち「気枯れ」の場である病院から戻ってきた人が、〈ハレ〉の空間である着物屋さんに立ち寄り、「元気になって」自宅へ帰って行くという実話を、私は知っている。つまり、華やかな「晴れ着」を身にまとう〈ハレ〉の時空間を持つ、「気晴らし」という効果を、このエピソードは意味していると言えよう。

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

このような、一時的な「気枯れ」の状態としての病気は、大きな気の循環と〈繋がる〉ことで「治る」と言えよう。瀕死のリンゴと向き合う木村が、自らも自殺を覚悟しながら、「自然」すなわち〈生き方の違ういのちの繋がり〉に気づき、リンゴと自らを「死」から「再生」させたように。

それは、「無縁死」や「自殺」を多く生み出す今日の〈孤人〉社会もまた、「気枯れ」の状態に陥ってしまっていることを意味しているのではなかろうか。

しかも、「気枯れ」は、大きな気の循環との〈繋がり〉が忘れ去られてしまうと、「穢れ」として固定化されてしまう。〈ケガレ〉に対して行われる〈キヨメ〉も、本来は「気」を「蘇らせる」営みではないかと私は思うが、では、どうやって、今日の〈孤人〉社会の「気枯れ」を、「蘇らせる」ことができるのだろうか。

### （2）《悪魔祓い》という儀礼の意味——〈繋がり〉の中での「再生」

〈ケガレ〉の病気を〈ハレ〉の時空間に置くことで、大きな気を循環させ、病気が「治る」ことを、上田紀行はスリランカの《悪魔祓い》を事例として説明している。

そのスリランカの《悪魔祓い》というのは面白くて、病院などでも治らない病が、村ぐるみの儀式で治ってしまうというものなんです。

たとえば、一家のお父さんのやる気がなくなってしまい、一日中塞ぎこんでいるとか、子供が不登校になったとか、お母さんがノイローゼになってしまったとき、スリランカの田舎では、「あの人には《悪魔》が取り憑いた」ということで、徹夜で《悪魔祓い》の儀式をするんです。さすがに近代化した都会の人はやらないんですけど、農村部では二〇〇人、三〇〇人と村中の人を集めて、徹夜の《悪魔祓い》をするんです。

それは歌あり踊りありの活気ある場で、途中では患者に悪魔が乗り移って緊迫するんですが、朝方には仮面をつけた悪魔がジョークを連発するお笑い演芸会のようになり、患者も村人も腹の底から笑いあうんですよ。〔清水・上田 2010：60-61〕

これは、まさしく「気枯れ」の状態にあった患者が村人とともに〈ハレ〉の時空間に身を置き、病気が「治る」ことを意味しているよう。スリランカでは、「孤独な人に悪魔が憑く」というが、「やっぱりその人の表情を見ると、周囲が気づく」のだという。「周囲が気づく」かそうでないかが、スリランカと〈孤人〉社会を分かち何かなのではなかろうか。

でも、この風習の良いところは、どつぼにはまったときには《悪魔》が憑いて、そうならば村人が総出で集まって心配してくれて、《悪魔》を取り払ってくれるという

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

ことを、子どもの時からみんなが見て知っているということなんです。

「なあんだ、俺のためにこれだけ村人が集まってくれるじゃないか。俺って愛されてないと思いきんでいたけど、本当はこんなに温かい人に囲まれているんだな」と再認識して、心の寂しさや苦しみが解きほぐされていくんです。さらにこれは仏教の儀式ですから、悪魔は仏様の力で祓われるわけで、仏様が自分を支えてくれるという再確認でもあるわけですね。〔清水・上田 2010：63〕

つまり、「気」が枯れてきて心身ともに疲れ果ててしまったときに、「自分のつらさや悲しみ、弱さを曝け出しても大丈夫、周囲がそれを受け止めてくれると、社会全体でわかっている」ことの大切さを、上田と清水は訴えている。

だから悪魔はいた方がいいんです。日本はそうした《悪魔祓い》のような孤独を救うシステムがなくなってしまったところに、大きな文化社会的な危機があるのです。〔清水・上田 2010：64〕

かつては日本にも、憑いた狐を祓うために村落ぐるみで行う「憑きもの落とし」の儀礼や、病者と家族が寺院・神社・温泉などに一定期間滞在し、現地の人びとや自然に支えられてゆっくりと「治って」いく「民間治療場」が存在していた〔橋本 2010、兵頭2012〕。そこでは、孤立しがちな病者と家族の「孤独を救うシステム」が、確かに存在していたと言えよう。

しかし、近代以降、「憑きもの落とし」は裁判で裁かれるようになり、近代以降に栄えた民間治療場もまた、戦後、1950年に精神衛生法が制定され、病院以外での病者の保護が法的に禁じられると、徐々に姿を消していった。それに代わる、かつてのような「孤独を救うシステム」は、未だ不在のままである。

現在は、「気」が枯れてしまうことすら、本人の「自己責任」にされてしまう傾向にあると言えよう。その結果、精神科に通院する人は後を絶たない。しかし、「気枯れ」の状態が長く続くと、服薬や入院で対応しても、病気が長期化してしまうおそれがある。

特に、精神科病院への長期入院は、一時的な「気枯れ」の状態が固定化されてしまうリスクが非常に高い。すべてが医療の管理下にある精神科病院では、毎日の生活の起伏や変化が非常に乏しく、かつての日常すなわち〈ケ〉との接点も断たれ、ついには自殺さえ考えてしまうほどの空虚感を覚えるのだと、四十年近くも入院している患者は訴えている〔織田 2011〕。

そのような、病気を〈ケ〉、つまり日常に「戻す」営みとして、北海道浦河「べてるの家」

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

の試みはあると言えよう。病気が長期化する中で、日常的に「つき合っていく」ための工夫を模索する人びとは、病院から退院して共同生活や商売を始めた。彼らを診る精神科医・川村敏明は、次のように語っている。

人からの評価だとか世間の価値観だとか、そういうんじゃないくて、やっぱり自前の感覚が出てきているぶんだけ、べてるのメンバーはおとなっぽい、なんかこうゆったりと生きてる感じがします。そのへんの生き方のなかに、たくさん教えられるところがあるし、ぼくらの価値観の方が単純すぎたなということがいっぱいありますよ。

だから、あんまりぼくは働きたくないんだという人と、ぼく [川村医師] はあんまり治せない医者なんだということと、そう差がない。働くことだけが大事だとか、病気を治すことだけが大事だとか、そういうふうには思っていないということですね。

もう少し自分たちの存在や相手の存在も役割も、広く見てみようよと。そういう感覚で見てみたら、精神病をもって生きる世界も、いままでよりはずっと広く見えてきたという感じじゃないかなと思うんですよ。〔斉藤 2010：208-209〕

それは、「治さない」というわきまえの先に立ち現れた、医者も患者も「おたがいさま」の世界である。そこに、かつての「民間治療場」に通じるような、「治る」までを地域の人が見守っていくという、〈孤人〉社会を開く大きなヒントがあるのではなかろうか。

以下に引用するのは、当事者の清水里香が、夕食のキムチ鍋をみんなで囲みながら、新人の当事者たちに語りかけた言葉である。

みんなに（自分の苦勞、悩みを）打ち明けてくるから、いいことだよ。それだから、みんな笑ってくれる。そうでなかったら、悲惨な話だと思うよ。ひとりでやってたら、そら、生きるか死ぬかの世界に陥っちゃうわ。それが、だれかが笑い飛ばしてくれるところにいるっていうのは、しあわせだね。〔斉藤 2010：224〕

「笑い飛ばしてもらえるしあわせ。…そこまでの積みかさねがないところで、そして笑ってくれる人がいないところで、どれだけ多くの当事者が「死ぬわ生きるわのたいへんな世界」に陥っていることか」〔斉藤 2010：224〕と斉藤は言う。しかし、それは、精神病の当事者に限られたことなのか。むしろそれこそが、今の〈孤人〉社会の問題性を、最も如実に示しているのではなかろうか。

スリランカにある《悪魔祓い》とはつまり、周囲の人びとに「笑い飛ばしてもらえるしあわせ」であり、そのような「孤独を救うシステム」を失ったところに、今日の〈孤人〉

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

社会の危機があるのではなかったか。それを「開く」試みを、「べてるの家」の人びとは続けてきたのではなからうか。

そこで、次章では、精神病の当事者と家族の孤独を、中村ユキの自伝的マンガ『わが家の母はビョーキです』を通して検討してみたい。

### 4. 〈繋がり〉が断たれた病——当事者の孤独／家族の孤独

#### (1) 『わが家の母はビョーキです』——病気の始まりと、重なる孤立

この物語は、DV（家庭内暴力）の家庭で育った母親が、定職に就いていない父親と結婚したところから始まる。娘・ユキが生まれ、父の実家で同居することになったが、ギャンブル狂いの父も難しい姑も、育児に一切協力しようとしなかった。「お金もないしDV実家で子育てはムリだもん…ガマンしなくちゃ」と、母は孤立に陥る。娘は、このことを、次のように述懐している。

『友人も知人もいない大阪で／実家にグチをこぼすこともできず  
母のココロのよりどころは私〔娘〕だけになった』（中村 2008：20-21）

しかし、月日の分だけ絶望感も増し、しだいに眠れない日が続くようになる。そして、結婚して5年後、「悪口が聞こえる」ようになり、実家に帰っても奇異な行動が目立つようになる、母は、地元の山奥の精神病院に入院し、「精神分裂病」との診断を受ける。

ところが、母は退院後、精神科には通わなかった。問題行動を起こさないで、周囲は治ったと思っていたという。しかし、母の幻聴はずっと続いていた。「どうせ言っても否定されるだけだし…だまってガマンしよう…」「だけどなんで／みんなには聞こえないんだろう…？」と、彼女は思い、退院から約一年度、「悩んだあげく家族に相談するコトもなく」自ら大学病院の精神科を受診する。精神科に通い服薬を続けるものの、幻聴はいっこうに消えず、父方の親戚からは、「頭のおかしい嫁とは離婚した方がいい」とさえ言われてしまう。

「もう疲れた…しんどい」「死にたい」と思うものの、「娘のために生きていなきゃ」と決意し核家族になるが、父は相変わらずギャンブル狂い、『母は少しずつおかしくなっていく』（中村 2008：28-30）と娘は述懐している。

ここに、〈孤人〉社会の犠牲者の端的な姿がある。では、母は、娘は、どうすれば救われるのだろうか。



## （2）母の孤独と、娘の孤独——折り重なる孤立の連鎖

母は、大学病院の精神科に4年通いつつ、家計のためにパートを始めるが、「クスリを飲むと頭がぼーっとして働けないので」抗精神病薬をきちんと飲まなくなる。そこには、「どーせ／飲んであんまり変わらないし」という諦めがあった。しかし、その結果、病状がますますひどくなり、月に数回「急性症状」が起こるようになってしまう。

母は、人が変わったように「豹変」し、包丁で娘を「コロセ」と呟きながら追い回す。我に返ると、「ゴメンね…お母ちゃん／またなんかユキにひどいコトしたのね」「ああ…もう死んでしまいたい」と嘆く。『母は正気に戻ると「死にたい」と泣いてばかりいた』この繰り返しが続くのである。『そしてこんな状態でも／家計のためにと病気を隠してパートに出なければならなかった』のだと、娘・ユキは述懐している。

しかも、辛かったのは母ばかりではない。娘・ユキの痛みもまた、隠され続けなければならなかった。そのことを、ユキは、『私の長いかくれんぼのはじまりでした』と語っている。

「豹変」中の記憶がない母を、「泣かないで」「もういいの／大丈夫」と励まし続け、「お母ちゃんには何か憑いてる」と確信し、独りで宗教団体に入信するが、結局何も変わらなかった。「そんな中／一番ツラかったことは…父親がまったく頼りにならなかったコトだ」と、ユキは述懐している。当時、ユキはたったの11歳だった。

『自分のコトは自分だけでなんとかしなくちゃ!!』

ひとりのほうが平和だ／さみしいだけならガマンできるもんね〔中村 2008：46,57〕

こうして、母だけでなく、娘もまた、病気を始めとする辛さや悩みを、誰にも相談できなくなってしまった。「お母ちゃんのコト…まさか言えないもんなあ…」と、ユキは学校の友人にも母のことを言い出せなかった。この問題性を、中村ユキは、次のように指摘している。

この病気を抱える生きづらさは、周囲になかなか言い出せないことにもあります。

そして、家族は社会から「孤立」してとても苦しくなってしまう…。

私もそんなひとりでした。〔中村 2008：167〕

つまり、〈孤人〉社会の中でも、精神病の家族と当事者は、いっそう辛い「孤立」の中におかれると言えよう。では、その「孤立」は、どこへ行き着いてしまうのか。

（3）行き詰まる孤独と絶望——「いいや／もう死んでも」

とうとう、娘・ユキサエ生きることを「あきらめた「7日間」」が来る。

母は離婚後、病気をおしての仕事が苦しく、アルコールなしでは働けなくなり、一方、娘は、今までの生活の辛さから、高校生で「一生独身」を決心、「何かを見つけてそれに人生を捧げよう」と思う。

娘は、高校卒業後にデパートに就職、二人で働いて経済的には安定するが、母の病状は変わらなかった。その空虚感から、「人生をかける何か」を探す娘は退職し、マンガ家になることを決意する。しかし、この一件が母に「多大なるストレス」となり、ある日、とうとうそれが「大爆発」してしまう。『初めて母を心底憎いと思った夜／母の豹変はおさまることもなく…』と、ユキは述懐している。

でも…いいや／もう死んでも／生きるのだから  
…どうか／痛くありませんように…〔中村 2008：64〕

こうして、娘も生きることさえ諦めてしまった。『6日目の朝／生きてたことにビックリしながら／母をロープで縛った私』は、「どうか／目が覚めたら正気でありますように…」と祈るが、『元に戻らない母に悲しくなっておばに電話すると／なんかよけいツラくなった』という。

7日目に母が自殺を図り、救急に電話、「かかりつけの精神科に行くよう」指示される。そこで初めて娘は担当医に会い、母が「世間話ばかり」できちんと病状を伝えていなかったと知る。つまり、患者である母と医師との間に信頼関係が欠如していたのだ。母は、なぜ病状をきちんと伝えなかったのかと問い質す娘に、「だって…恥ずかしいから…」と答えている。そこには、精神病特有の、打ち明けづらさが表れていると言えよう〔中村 2008：64-68〕。

母はそのまま、街中の精神病院へ三ヶ月ほど入院し、「薬漬け」のために退院後も「働けそうになく」、母娘で無職となってしまう。「お金もない／頼れる人もない／孤独だなぁ…私」と、ユキは当時のことを述懐している。まさに、母も娘も〈孤人〉なのだ。

『家に戻りひとり…星を見上げたら／ホッとして涙がこぼれた…  
そして…母を抱え／何をやってもこの先うまくいかないような絶望感におそわれた』〔中村 2008：69〕

なぜ「精神病」という病気を抱えて生きることは、これほどに孤独を強いるのか。なぜ

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

母は何度も精神医療を受診しているにも関わらず、全く救われていないのか。ここに、〈孤人〉社会の問題を端的に象徴する、「精神病」の当事者と家族が抱える生きづらさがある。幾重にも孤立の中に閉ざされたこの問題を、どうすれば「開いて」いけるのだろうか。

### 5. 〈繋がり〉の再生と回復のきざし——<sup>あいだ ほど</sup>間で絆されていく関係へ

#### (1) 「クローズ」で生きてきた限界——ひたすら隠してきた病気を「開く」

「これまでいろんなコトを／ひとりで考えてきた」「結婚しても／お母ちゃんのコトは『ひとりで抱えていかねば』そんなふうにしていました」〔中村 2010：156〕と、中村は述懐している。当事者を母に持つ娘・中村ユキは、母自身も含め、まさに〈孤人〉だったと言えるだろう。

退院後、母は叔母と同居するが病状が再発、警察署で騒動を起こして「措置入院」になってしまう。『私はすごくショックだった！／でも／なんか／ホッとしてもいて…』と、ユキは当時の心情を述べている。自分の辛さを、叔母に分かって貰ったことで気持ちが楽になったのだ。『今まで必死に母の病気を隠してきたけど／コレを機に／何かが吹っ切れた気がした』〔中村 2010：84〕と、ユキは、病気のことを「開いた」自分の気持ちを明確に述べている。

しかし、2年後に退院した母は、入院中に15kgも太り、生活能力も著しく減退していた。母娘で上京、娘は新しい職場で仕事に励むが、母は身近に知り合いもおらず「ほとんど引きこもり状態」になってしまう。

『母はひとりの間／幻聴と戦っていた』『無表情でボーッとしているコトが多く／毎日ゴロゴロと寝てばかりの生活…』という母の様子を、ユキは、「(あ、また／死んだ魚の目！)」だと感じている。母は、その孤立の辛さを、次のように訴えている。

「苦しいんだよ／好きでグータラしてない!!」「何もヤル気は起きないし／幻聴はウルサイし／ツライよ」「生きていても楽しくないの」「死なせて」〔中村 2010：100-104〕と…。何度も死を希うほどの孤絶の日々が、またもややって来たのだ。

では、生活環境が大きく変わったにも関わらず、なぜ病気は、繰り返し「やって来る」のだろうか。「べてるの家」の当事者の一人は、その心境を、「禁断の世界。なんか、世界に俺ひとりしかいなかったみたいなの」〔斉藤 2010：175〕と語っている。まさしく、〈孤人〉の心境である。精神病という病気は、〈孤人〉である内はどうしても治らないのだ。では、母の病気のことを「開いた」娘に続き、母は、どのように「開かれて」いくのだろうか。

（2）社会との〈繋がり〉で「開けた」心——差し伸べられた支援の手

先述したように、〈孤人〉だった母に、地域生活支援センターとの出会いが訪れる。それは、保健所のデイケアを卒業した先に「開けた」未来だった。

病気のことをスタッフや当事者仲間に打ち明けられるようになった母は、「ねえ／ユキも「地域生活支援センター」に遊びにおいでヨ」という。娘は、「（私が行ってどうするの？／行ったからって／どうなるの？）」と、戸惑いを隠せない。しかし、ある日、地域生活支援センターを訪れると、そこにはユキ曰く「ありがたい」「開き」が待っていた。

「今まで本当に大変でしたね」「これからは私たちがついていますから／困ったコトがあったら何でも相談してくださいネ」と、スタッフはユキに優しく声をかけた。ユキは思わず、「ありがたい」と涙する。

『保健婦さんと疎遠になって以来／ひとりだと思ってた私』

『誰かに苦しい胸の内を聞いてもらえるというコト…』

困ったときに相談できるというコトが／こんなに心を軽くしてくれるなんて!!」〔中村 2010：107-110〕

さらに、「〔統合失調症〕は<sup>脳</sup>の<sup>病</sup>気<sup>で</sup>／治療可能です！〔傍点原文〕」とスタッフに言われ、「なんか<sup>脳</sup>の<sup>病</sup>気<sup>って</sup>わかったら／不思議！／コワくなくなった」と心境の変化を告げている。今まで、母も娘も、病気のことを隠していたから、正しい知識を得られなかったのだ。

こうして、母の居場所ができ、娘も安心することができた。「今まで<sup>ビョーキ</sup>精神<sup>病</sup>の<sup>コト</sup>話したら／みんな連絡くれなくなっちゃった」「だけど／支援センターのみんなは一緒にいてくれるの」と、母も心境の変化を訴えている。ようやく、母も娘も〈孤人〉から開かれたのだ。『母が支援センターに通うようになって／安心して生活できる時間が増えた』と、ユキは述懐している。

「お母さんは1日の感情の起伏が激しいんですけど／抗<sup>オクスリ</sup>精神病薬はどんな内容ですか？」とスタッフに問われ、「エッ!?／知らない」と答えたユキは、「もっとトーチツの<sup>コト</sup>わかったら／不安が減るよね」『私のココロに小さな変化が訪れた』『このときから少しずつ／母の病気に踏み込む意識が!!』と、母の病気に関心を持つようになっていく。

そして、転院後、少しずつ薬を変え、長年苦しんでいた副作用からようやく解放された。「今までツライだけで／何のためにクスリ飲んでるのかわからなかったんだ」のだと、母は告げている。それまで無表情だった母は、生き生きとした表情をやっと取り戻した〔中村 2010：116-130〕。薬の変化さえも、母と娘が〈孤人〉から開かれたことに帰因してい

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

るのだと言えよう。

こうして、幾重にも閉ざされていた孤独が、人の間で絆あいだされることで、母と娘は救われていく。そこに、〈孤人〉社会を開く最後のヒントがある。順を追って見ていこう。

### （3）互いに支え合える居場所——家族という「安心」へ

やがて、ユキはアシスタント先で知り合った男性・タキと結婚、母も含めて同居することになる。その「きっかけはお母ちゃん」だった。

しかし、病気のことをうまく説明できないまま同居が始まり、ユキと母の不安から、症状が再発してしまう。だが、夫が、「一緒に暮らしてきたから／本当のお母ちゃんのコトわかっているもの」と、ありのままを受け入れてくれたことで、自信と信頼の絆が生まれ、症状も大きく安定してきた。

『ビョーキを含めたありのままの姿を受け入れてもらえたコトで  
結婚当初からずっと抱えていた「母のビョーキのコトで終わりがくるかも」  
そんな不安感が消えました』〔中村 2010：100-102〕

夫・タキは言う。「家族なんだから／これからはお母ちゃんのコトも一緒に考えよう」と。その言葉に胸を打たれ、「(一緒に…)」と、俯いていた顔を上げたユキは、『この日をさかいに肩の力がぬけ／ココロに余裕が生まれたような気がします』と述べている。母と娘の間で閉ざされていた病気が、ここでもようやく「開かれた」のだ。タキは、「これからは／お互いに自然体でね」と語っている。

いつも助け支えてもらっているのは、他ならぬタキのほうなのです。

互いに支え合うことで居場所を実感し、前に進める。それが家族なのかもしれませんね。〔中村 2010：104〕

ユキは言う。『ツライとき／悲しいとき／苦しいとき／不安なとき／困ったときは自分ひとりで考えるのが習慣でした』と。これは、まさに〈孤人〉の生きづらさを体現する言葉だろう。しかし、タキは言う。「一緒だから大丈夫!」「一緒に考えよう」と。そこでユキは、『ひとりじゃないって／なんて心強いんだろう』と感じ、「ありがとう」と告げる。このように、〈孤人〉は、人の間で絆あいだされることで初めて「開かれる」のではなからうか。私たちも、望みさえすれば、幾重にも開かれていくのではなからうか。「べてるの家」の人びとがそうであったように。あるいは母とユキ、タキがそうであったように。

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

ユキは、『支えてもらえる幸せと安堵感』から、『ココロに余裕ができて／フと気がついた』と述べている。「私いつからか／自分の都合ばかりで／お母ちゃんの立場で考えてなかった」『自分ばかり苦勞してきたと思っていたけど／病気の母はもっとツラかっただろう…』と。『ココロが寄り添わなかったら／一緒にいても孤独だ…』と。それこそが、今まで、母と娘・ユキが救われてこなかった一番の要因ではなかったか。あるいは、それこそが、今の〈孤人〉社会における希薄な〈繋がり〉の一番の盲点なのではなからうか。

そして、ユキはようやく気付く。『ずっと私のコトを一番に心配してくれた母』『自分ばかりが手を貸してきたつもりになっていたけど／ほんとは自分も支えてもらっていたんだ…』と。『家族と当事者が／お互いに相手の立場に立って共感しあうコトで／優しい感情きもちが生まれてくる』——ここでようやく、母と娘の「長いかくれんぼ」が終わったのだ。

母は言う。「ユキもタキさんもいてくれるし／支援センターのみんなに囲まれて／今が人生で一番幸せなんだ」と。タキも言う。「俺さあ／障害って特別なコトのように思っていたけど…／介護施設に勤めはじめて／身近に感じるようになったんだ／誰もが老いとともに／あちこち少しずつ不自由になっていくんだって」「俺たちもどんどんできないコトが増えていくんだよ」と。介護施設に勤めるタキならではの気づきだろう。

そう、精神病という病気だけが特別なわけではない。誰もが、〈孤人〉のままでは生きづらいからこそ、今が「無縁社会」であり「自殺社会」なのだ。老いが、あるいは「誰にも迷惑をかけたくない」という希薄な〈繋がり〉が、かけがえのない〈いのち〉を、無縁死や自殺に追い込んでいく。「支え」は、本当はあるはずなのに、誰もがそれに気付くこともできないほどの「孤絶」に追い込まれてしまうのだ。

ユキは言う。『「病めるときも健やかなるときも」／結婚式の誓いのコトバ／あらためてもう一度考える』『病めるときこそ家族の出番／お互いさまのキモチを大切に／家族で一緒にトーシツライフしていきたいと思う』〔中村 2010：156-161〕と。

いま私たちが生きている〈孤人〉社会は、「病めるときも健やかなるときも」安心して生きていける社会となっているだろうか。しかも、家族形態が核家族へと変容し、家族だけでは抱えきれない問題が生まれたとき、どうすればよいのだろうか。「お互いさま」に「支え合う」、かつてとは異なる社会のありようは、どうすれば開かれていくのだろうか。

### 終わりに——〈孤人〉社会を開くために

以上、本論文では、〈孤人〉社会を開くために、今、何が必要なのかを検討してきた。

「私にもあなたと同じように狐が憑く」という、近代以前の心身観こそが、「私はあなたと違って病んでいない」という〈孤人〉社会の心身観を問い直し、「我々」という近代特有の「虚偽の主体」を、「私」と「あなた」が互いに「生きて、見て、感じて」いる「私

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

たち」の世界観へと改めていくことが、〈孤人〉社会を開いていくことに繋がる。そこでは、スーパーの食肉も、リンゴも、ともに生きている〈生き方の違ういのちの繋がり〉であり、私たちの〈いのち〉は、〈孤人〉の心身だけで完結しているだけではないと言えるだろう。木村秋則と「奇跡のリンゴ」が、互いを生かし合っているように。「べてるの家」を取り巻く人びとが、「お互いさま」で「いいかげん」の世界へ、当事者の孤独、治せない医師の孤独、斉藤道雄という傍観者の孤独を、ゆっくりと世界へ開いていったように。

一時的な「気枯れ」の状態である病気は、大きな気の循環と〈繋がり〉、たとえば《悪魔祓い》や「民間治療場」のような〈ハレ〉の時空間に身を置くことで治っていく。ここで大切なのは、「気」が枯れてきて心身ともに疲れ果ててしまった時に、「自分の辛さや悲しみ、弱さを曝け出しても大丈夫、周囲がそれを受け止めてくれると、社会全体で分かっている」ことの大切さであると同時に、私たちの心身が、常に既に、自然や世界へと開かれており、そのことに気づきさえすれば、「孤立して生きている命はない」のだということ、この世界の中では、「すべての命が、他の命と関わり合い、支え合って生きている」のが当たり前なのに、人間だけが、「自分独りで生きていると思っている」のだという近代特有の誤りを正すこと、もう一度、「私を含めての一体として、世界を見る」見方、感じ方を、取り戻す」方向へと開いていくことが、最も重要なものではなからうか。

身近にある総ての〈いのち〉をモノとして消費してきた近代社会が、〈生き方の違ういのちの繋がり〉を忘れさせ、「誰にも迷惑をかけたくない」という〈孤人〉社会特有の希薄な〈繋がり〉を生み出した。誰にも迷惑をかけず、生きていける〈いのち〉など、この世にはそもそも存在しないのだ。そのことを思い出したとき、木村秋則と「奇跡のリンゴ」も、「べてるの家」の人びとも、そして母とユキ・タキも〈孤人〉から救われた。

かけがえのない〈いのち〉の「無縁死」や「自殺」を他人事ではなく、ただ単に我がこととして身近に感じるだけでもなく、この問題がこの社会全体の、ひいてはこの世界全体の「気枯れ」や「痛み」であり、誰もがこの問題と無縁ではいられないととらえられるかどうか、〈孤人〉社会を開く、一番重要な鍵なのではなからうか。

〈孤人〉社会を開くこと。「無縁社会」や「自殺社会」を終わらせること。それこそが、亡くなっていった多くの人びとへの何よりも「弔い」なのではないかと、私は思う。

### 注

- 1) ハンセン病を発病した塔和子は、「療養所の戸籍簿に記入させられ」、「ここへ入る人は、大抵偽名を使いますよ。家族への迷惑を考えて」と言われている。塔和子とは、彼女の夫が名付けた和子のペンネームであり、彼女が詩人として広く名を世に知られた後も、実名を公に明かす機会は遂に来なかった。

## 〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

- 2) 「『完璧な母に』空回り——産後うつ 昨秋出産の記者が経験」『朝日新聞』2008年12月5日付。
- 3) フーコーは言う。「個人と呼ばれるべきもの、それは、私がみなさんに示した技術〔規律〕によって政治的権力が身体の単一性にしっかりと固定されたことから生じた成果のことであり、その結果のことです」〔フーコー 2006：71〕と。身体の単一性という指摘は、本論文でも重要なテーマだが、ここではさらに、それを心身の単一性へと広げ、〈孤人〉と新たに名付けた意味を最大限に生かしてみたい。
- 4) 宮崎哲弥「サンデルの問い——現実を「私たち」から考える」『朝日新聞』2010年7月21日付。
- 5) 宮崎県南部で牧場を営んでいる人の日記より。
- 6) 本来は、「イキカタノチガウイノチノツナガリ／ニンゲンノエラクナイセカイ」という、いしづかんなの言葉から、漢字に置き換えさせて頂いた。いしづかんな：<http://www.kannaishizu.com/>より。

### ●参考文献

- 安宅温 2009『命いとおし 詩人・塔数子の半生——隔離の島から届く魂の詩』ミネルヴァ書房。
- 石川拓治 2008『奇跡のリング——「絶対不可能」を覆した農家 木村秋則の記録』幻冬社。
- 岩尾俊一郎 2009「書評『精神病の日本近代——憑く心身から病む心身へ』」『精神医療』54号。
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋、2010年。
- 清水康之・上田紀行 2010『「自殺社会」から「生き心地の良い社会」へ』講談社文庫。
- 織田淳太郎 2011『精神医療に葬られた人びと——潜入ルポ 社会的入院』光文社新書。
- 鎌田正・米山寅太郎 1986『新版 漢語林』大修館書店。
- 金田一京助、柴田武、山田昭雄、山田忠雄 1993『新明解国語辞典 第四版』三省堂。
- 斉藤道雄 2010『治りませんように——べてるの家のいま』みすず書房。
- 末本文美士 2006『仏教 vs. 倫理』ちくま新書。
- 仲野実 2009『近代という病いを抜けて——統合失調症に学ぶ他者の眼差し』批評社。
- 中村生雄 2010『日本人の宗教と動物観——殺生と肉食』吉川弘文館。
- 中村ユキ 2008『わが家の母はビョーキです』サンマーク出版。
- 中村ユキ 2010『わが家の母はビョーキです2 家族の絆編』サンマーク出版。
- 橋本明編 2010『治療の場所と精神医療史』日本評論社。
- 兵頭晶子 2008『精神病の日本近代——憑く心身から病む心身へ』青弓社。
- 兵頭晶子 2012「民間治療場の近代——「治療の場所」の歴史から」『臨床心理学研究』50巻1号、日本臨床心理学会。
- フーコー、ミシェル 2006『ミシェル・フーコー講義集成4 精神医学の権力』慎改康之訳、筑摩書房。
- 藤澤敏雄 1982『精神医療と社会』精神医療委員会。

【付記】 本論文は、兵頭晶子『『千と千尋の神隠し』から、〈孤人〉社会の来歴を問う—新しい



〈孤人〉社会を開く（兵頭晶子）

歴史民俗学のために」イシバシ評論編集部編『イシバシ評論 Cultures/Critiques別冊』国際日本学研究会、2016年3月5日と対になったものである。ご参照頂ければ幸いである。

（ひょうどう あきこ 日本思想史学会会員）